作業ラインの工程を説明する富士ミネラルウォーター社長の澤辺正恭さん＝山梨県身延町で

わが町 日本一

ミネラルウオーター生産量 山梨県

被災地うるおす使命

富士ミネラルウォーター社長・澤辺正恭さん（69歳）

四方を山に囲まれたのどかな湯治場には、湯けむりがよく似合う。温泉か…？　いや、出迎えてくれたのはミネラルウオーターのビンを洗う蒸気だった。

山梨県身延町にある「富士ミネラルウォーター」の工場は、のんびりとしたたたずまいの身延線下部温泉駅から歩いて一分。訪れた三月末、ここに最前線の慌ただしさが待っていた。

「休日返上で無理してもらってます」と同社社長の澤辺正恭さん(六九)。従業員を気遣いながらも使命感をにじませる。富士急行会長で元衆院議員の堀内光雄氏の秘書を長年務めた人だ。

事務所には阪神・淡路大震災での貢献に対する農林水産大臣の感謝状が飾られていた。東日本大震災の被災地にも、いち早く水を送ったそうだ。

山梨県はミネラルウオーターの生産量日本一を誇る。富士山が育む名水が豊富で、首都圏への物流にも有利。大手企業も採水し、全国シェアの三割を占める。

日本初の本格的ミネラルウオーターの誕生も山梨からだった。同社の前身・堀内合名会社が一九二九（昭和四）年に発売した「日本エビアン」がそれ。初代南満州鉄道総裁の後藤新平が下部温泉を訪れた際に飲んだ湧き水を「フランスの『エビアン』よりうまい」と絶賛。それをヒントに富士急行の創業者でもある堀内良平が販売を始めた。戦時中は「エビアン」が敵性語とされ、「富士鉱泉」にラベルを変更。戦後、現在の「富士ミネラルウォーター」になった。

発売当初から帝国ホテルなど一流ホテルで扱われ、宮内庁も上得意。日本で開催されたサミットでは五回とも卓上水として公式採用され、各国首脳の喉を潤した。日本一の山、富士の名を冠し、名実共に日本を代表する水となった。

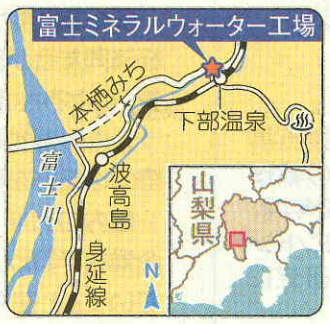
長年、工場の近くで採水していたが、二〇〇七年から採水地を富士吉田市に変更した。富士山により近い標高約八四〇メートル地点からくみ上げ、タンクローリーで工場に運んでいる。念入りにろ過して、百二十度で加熱殺菌。ビンやペットボトルに充填(じゅうてん)後、ベテランスタッフが一本ずつ厳しくチェックする。

ビン入りは昔からの顧客に親しまれ、欠かせない商品。だが一リットルペットボトルを他社に先駆けて採用したのも同社だ。今では売り上げの八割がペットボトル入りという。

「備蓄用のご注文も増えていたところなんですが…」。話の間も次々と澤辺さんの携帯電話が鳴った。なんとか水を確保したいという直訴らしい。

「被災地に持って行く方にはなんとかしたい。それ以外の方にはお待ちいただかないと…」。物腰やわらかながら、非常時での肝は据わっている。

文・村手久枝
写真・田中紀男



幼児のミルク用にも

★メモ　日本ミネラルウォーター協会によると、2010年の都道府県別生産数量では山梨県が62万5271キロリットルで全国1位。2位の静岡県（38万4558キロリットル）を大きく引き離し、1997年の調査開始以来トップを独走している。国産のほとんどは、カルシウムやマグネシウムが少ない軟水。軟水は抽出力が強く、コーヒーや紅茶、だし汁を作るのに適し、幼児のミルク用にも良いとされている。富士ミネラルウォーターはバナジウムを多く含んだ弱アルカリ性の軟水。

SUNDAY